

⑤ 最終処分場の残余年数

2004年度現在、一般廃棄物の最終処分場の残余年数は全国平均で13.2年である。最終処分量が減少傾向にあり、残余年数は横這いで推移している(環境省 2007)(図 3-12 上)。また、産業廃棄物の最終処分場の残余年数は7.2年分であり、増加傾向にあるものの依然として厳しい状況にある(環境省 2007)(図 3-12 下)。

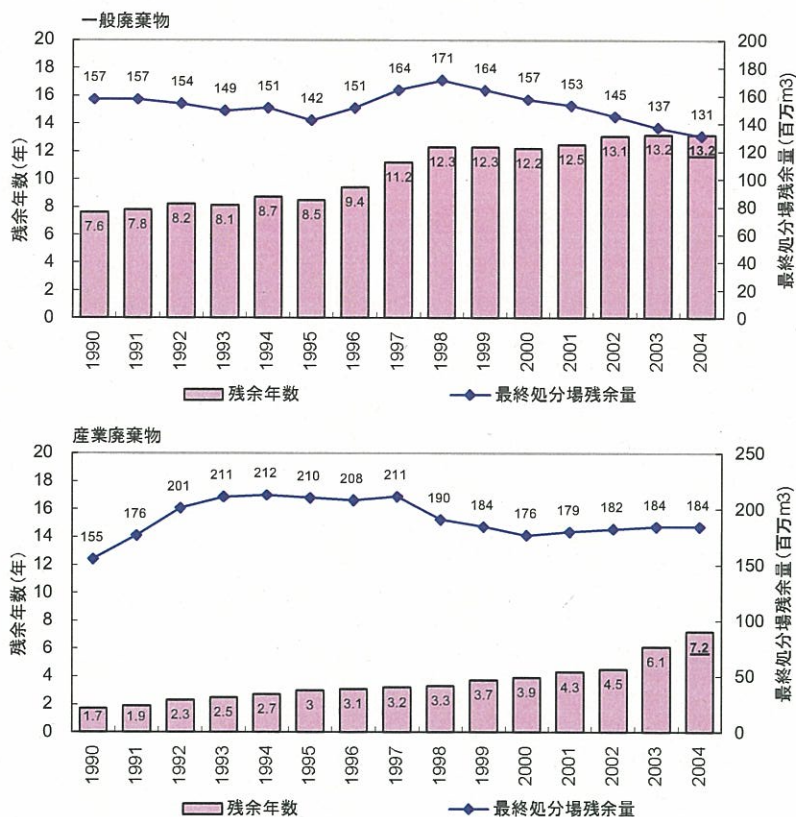


図 3-12 最終処分場の残余容量及び残余年数

出典：環境省資料より作成

(3) 水循環の問題

水は世界全体として循環している再生資源であるが、発展途上国における人口の増加と一人あたりの水資源需要の増加から、地理的にその需給に大きな偏りがあり、深刻な水不足が将来予想される(図 3-13)。一方、先進国の都市部においては、本来の水資源が分断され晴天時には水が乏しい反面、雨天時には内水氾濫(河川の水位の上昇や流域内の多量の降雨などにより、河川外における住宅地などの排水が困難となり浸水すること)が生じるという問題が一般化している。

4.2 循環型社会から見た環境像

(1) 循環型社会の定義

循環型社会とは、資源採取、生産、流通、消費、廃棄などの社会経済活動の全段階を通じて、廃棄物などの発生抑制や循環資源の利用などの取組により、新たに採取する資源をできるだけ少なくした、環境への負荷をできる限り少なくする社会(21世紀環境立国戦略(閣議決定 2007)より)をいう。

この社会では 2050 年時点において、主な環境に係る要素については次のような状況となっているべきと考えられる。

- ・ より少ない天然資源の投入で効率的に GDP を生み出している。
[資源生産性(=GDP÷天然資源等投入量)が現状よりも大幅に上昇]
- ・ 天然資源及び最終処分量を減らすように適正な循環利用が進んでいる。
[循環利用率が現状よりも大幅に上昇]
- ・ 希少金属の枯渇を緩和したり、枯渇危機の影響を回避するために、製品中の希少金属の適正な循環利用が進んでいる。
[個々の金属の循環利用率が現在よりも大幅に上昇]
- ・ バイオマス天然資源や循環利用資源の適正な利用の拡大によって、化石燃料や金属鉱物の枯渇性天然資源の使用量が削減されている。
[「(循環利用量+再生可能資源投入量) / (循環利用量+天然資源等投入量)」や「再生可能資源投入量 / 天然資源等投入量」が大幅に上昇]
- ・ 物質の利用に伴って生じる汚染が生命、健康、生活環境に悪影響を及ぼすリスクが、現在の許容範囲以下になっている。

(2) 循環型社会の環境像

長期にわたって資源枯渇が生じないことを目指すとともに、廃棄物の発生抑制や資源の循環利用の取組が進んでいる。2050 年においては資源生産性、循環利用率が大幅に向上し、これに伴って最終処分量が大幅に減少している。また、発生した廃棄物からは、環境負荷を最小化する形で、バイオマス系の廃棄物の有効利用をはじめとして、資源・エネルギーの回収が徹底して行われており、最後に残る廃棄物も適正に処理されている。希少金属など高い資源的価値をもつ物質の有効利用、循環的利用が進み、資源が確保されるとともに、これらの採掘によって生じていた環境への負荷(隠れたフロー)が減少する。こうした状況は関与物質総量(TMR)の低下として計測することができる。

このような 3R を基本とした循環システムが、廃棄物の種類に応じて適切な規模で構築されており、地域での循環、各国国内での循環が徹底されている一方で、東アジア地域(日本・